

## 『メタ倫理学の最前線』全体について

伊勢田哲治

### 1、本書全体について

・全体として非常に充実したレベルの高いサーベイ集となっている。佐藤『メタ倫理学入門』を読んでメタ倫理学について本格的に勉強したくなったら、今ならここを出発点にするべき。とても勉強になった。

・章の構成も、理由、実在論 vs. 非実在論、暴露論証、実験哲学など、現在焦点になっている話題を中心に組み立てられていて、メタ倫理学の現在の見取り図としてもとてもよくできている。

#### 構成について気になった点

・歴史的な最初の3章と現在の論争をサーベイする第4章以降とがちょっと距離があるのが気になる。歴史的部分が少し「浮いている」ようにも見える。「メタ倫理学の最前線」を伝えることを主眼とした本書で、アリストテレス、ヒューム、カントといった定番の哲学者のメタ倫理学説を考察する章を入れた目的は何か。その目的はこの3章によってうまく果たされているのか。

・歴史的部分が浮いて見える1つの理由は、最初の3章と第4章以降をつなぐものとして、「メタ倫理学の歴史」のような章がないせいではないか。第4章以降への導入としても、メタ倫理学史的な章はあってもよかったかもしれない。「そもそもなんでこんなことを論じているのか」「なぜこんな対立構図になるのか」はメタ倫理学という分野がたどってきた歴史にかなり依存する部分もある（たとえば、なぜ「理由とは何か」がメタ倫理学のテーマなのかとか、「非認知主義」というオプションがなぜ存在し、なぜ「非認知主義」と呼ばれるのか、などというのは経緯がわからないと戸惑うのでは）。

・第Ⅲ部と第Ⅳ部はそれぞれ道徳的実在論と反実在論・非実在論を扱っているわけだが、それぞれの内部での微妙な路線対立についての論争の紹介になっていて、実在論と反実在論・非実在論の間での論争がどうなっているのかがわかりにくい。あるいは、暴露論証

と反実在論・非実在論がどう関係するかなど、章をまたいでの関連が見えにくくなっている。

## 2、各章について

各章について簡単に感想を書きたい。

### 第1章「アリストテレスともう一つのメタ倫理学」について

アリストテレスの倫理学への態度として、経験的知見の重視と実効性の重視という2つを指摘されている。38頁の「拙速に切り分けられたアボカド」の比喻は面白いのだが、はたして倫理学の三区分は「拙速」なのだろうか。諸学が未分化だったアリストテレスの時代から、長い時間をかけて自然科学、社会科学の諸分野が成長し、分かれていった。人間の心についての経験的な研究と概念分析が別分野となっていくのもそうした分野の分化の中で生じたことだと思う。哲学の中での専門分化もそれに遅れて少しずつ進行している。数百年かけたプロセスで分かれるのは「拙速」だろうか。

### 第2章「ヒューム道徳哲学の二つの顔」について

ヒュームを主観主義者として解釈するか非認知主義者として解釈するか、また主観主義だとしてもどういうタイプの主観主義として解釈するかというのは、ヒューム解釈の問題としては興味深い。

著者としてはウィギンズ解釈に同情的ということだろうか。『イングランド史』からヒュームのメタ倫理学上の立場を読み取るというのはおもしろいが、どのくらい妥当性があるのか。まったく別のタイプの文章を書いているときには思考の枠組み自体が入れ替わってしまうので、よほど意識的にやっていないかぎり整合性は期待できないものではないか。

### 第3章「カントの倫理学とカント主義のメタ倫理学」について

カント主義として一般にわら人形のように批判されるものとカントの倫理学を区別し、

カントにおける賢慮の役割を強調するという点は興味深い。

84～87 頁あたりの論述について。ここで問題になっている「可能性」はどういう様相なのか（論理的、物理的、心理的、認識的、あるいは他のタイプの様相？）。特に、結論として「そもそも道徳的規範の規範的制約を受けえない行為者の可能性」を退けるというときの「えない」の様相と「可能性」の様相はそれぞれ何の様相なのか。

#### 第4章「行為の理由についての論争」について

理由についての主な論争点が手際よく整理されていて見取り図として大変たすかる。

122 頁で、動機づけ理由が正当化をするときには事実や事態であり、動機づけや説明をするときは心理状態になると考えるのは「不自然だろう」とあるが、これは著者自身の判断だろうか。「なぜその液体を飲んだの？」という問いに、問いの文脈によって「ジントニックだから」という答えと「ジントニックだと思っていたから」という答えの2通りがあるのはむしろ自然だと思うが。

#### 第5章「自然主義と非自然主義の論争について」について

道徳実在論の中での自然主義と非自然主義の論争をこれもまた手際よく整理している。ただ、「穏健な非自然主義」というのが結局積極的には何を主張するのかがこれを読んでよくわからない。著者自身も現状ではよくわからないという立場だという理解でよいだろうか。そういうよくわからないものがなぜ論争の中で存在感を持てるのだろうか。

147 頁あたりのシュローダーの「理由の多重決定」は単純によくわからない。「だれのような欲求であつても」理由になるというのは自分にとってどうでもいい欲求でも自分にとっての規範的な理由になるというのか。それは理由の内在主義なのか。また、他人の邪惡な欲求なども規範的な理由となるのか。

#### 第6章「道徳的説明についての論争」について

道徳的説明についての論争を 160 頁の2つの論証の形に整理したのはわかりやすく助かる。

著者はA（道徳的事実は因果的説明で本質的役割を果たす）を肯定するほうに好意的なようである。「ヒトラーが大量虐殺を命じたのはヒトラーが道徳的に腐っていたからだ」という道徳的説明の例が何度か使われているが、社会学的な事実と同様な意味でより基礎的なものに supervene するものとして道徳的事実を捉えるなら社会学的な事実と同じような説明力を持つだろうというのは分かる。しかし非認知主義者など、そもそも道徳的判断は社会学的事実判断と同じような単なる事実判断ではないと思っている人にとっては、そうやって道徳的事実に因果的な効力をもたせようとすればするほど道徳的判断の規範的な側面が希薄になってしまうように思われるのではないだろうか。

## 第7章「進化論的暴露論証とはどのような論証なのか」について

認識論を専門にする著者らしく、まず知識や正当化の条件についての認識論的な一般論からはじめて、それらの条件が暴露論証の文脈でどう使われるかを見るというステップを踏んでおり、勉強になる。ただ、あまりにきっちりやりすぎていて、暴露論証がどういうものか、手軽にサーベイしてほしい人にとってはかえって読みにくいかもしれない。

暴露論証の論証形式について解説している箇所（194頁）で、論証の対象となる「基礎的な道徳的信念の形成方法」として「理性的・反省的な思考を介さずに即時的に道徳的信念を形成する方法」と特徴づけられているが、多くの倫理学者はそもそもそれが道徳的信念の正しい形成方法だとは言わないのではないか。これについての前提(2)を否定すると現存の暴露論証はまったくあてはまらなくなるのだろうか。

200～201頁で紹介されている第三要因説というのはよくわからない。「生存や繁殖の成功は概して良いことである」とか「高度の認知能力を持つ生物は権利を持つ」といったことが道徳的真理だとどうして想定できるのか？（現代の倫理学の主流の理論はむしろこれらが道徳的真理ではないと考えるほうに傾いていると思うが）。ある種の進化倫理学を受け入れることで暴露論証を回避するという（あまり魅力的でない）オプションがあるということなのか。

感性による論証（205～207頁）もよくわからない。進化論的暴露論証というのは経験的な論証だと思っていたが、ここで紹介されているジョイスの議論は想像の難しい可

能世界についての想像に依拠しているように見える。こういう要素を組み込むことは暴露論証の力を弱めてしまうことになるのではないかと思うがどうなのだろうか。

## 第8章「非認知主義についての論争」について

非認知主義とそれに近い認知主義の立場を手際よく紹介してくれている。ただ、こういう切り方をしてしまうと、たとえば動機づけの内在主義の問題について第5章のさまざまな立場がどう考えるのか、といった論点が見えにくくなってしまい、非認知主義の魅力もわかりにくくなるような気がする。

細かい点について

234 頁で折衷的表出主義が「信念を表出する」という立場だと説明されているが、信念を表明するのと信念を表出するのでは何が違うのかよくわからない。

236 頁で、コップの立場としてある発言が「彼に対する侮蔑」を暗に意味することができるといえる考えであることが説明され、そのあとで(2)は明示的な意味が真である場合でも「偽であることがあり得る」と説明されているが、「侮蔑」が真だったり偽だったりすることがありうるのか。「侮蔑しようとしている」という意図についての文が偽であることはありうるが、それは「侮蔑」そのものが偽であるのとは違うのではないか。

## 第9章「道徳的非実在論」について

道徳的非実在論に分類されるさまざまな立場を体系的に紹介しようとしている章だと思う。ただ、読んでいて他の章よりも引っかかる点の多い章だった。

冒頭 (248 頁) のフローチャートはわかりやすく見えるのだが、果たして虚構主義と錯誤説はこんなにきれいに分かれるものかという疑問がある。特に、この章で「革命的虚構主義」と呼ばれている立場は事実認識としては錯誤説に近いからこそ「革命的」に虚構主義を主張しているのではないか。解釈学的虚構主義と保存主義的な錯誤説の間ではたしかにこうした形で線を引くことができそうではあるが、話者の気の持ち方(どのくらい本気で自分の道徳的談話を信じているか)に依存する非常にゆらぎやすい線であるように見える。また、虚構主義が「道徳的判断が認知的である」ということを否定する立場だと

いう意味では虚構主義も非認知主義の一種ということになるので、最初の分岐の先が単に非認知主義とラベルされているのもまずいのではないか。

249 頁では、通常トリレンマという形で提示される議論がテトラレンマの形に作り直されている。しかし、追加された4番目の命題（外部の動機づけからの独立性）は本当に必要なのかよくわからない。これはたとえば、「万引は悪である」という判断をするのは事前にすでに万引をしない外部の動機づけがあるときだけだ、という可能性を排除することだろうか。しかし、そういう理由で道德判断に動機づけが伴っていたとしても、1でいう意味で「必然的」に動機づけが伴っていることにはならないので、結局もとのトリレンマに回収されるのではないか。あるいは、もともと1に含まれていた多義性を命題4を分立することで明示化したということなのか。あと、このテトラレンマが「ある種の道德的非実在論の論証として理解できる」(251 頁)というのだが、1がもっとも脆弱だと考えるならむしろ実在論の論証になるのでは。

道德的事実のテトラレンマ(251～252 頁)のほうでも、4(独立性)は1(必然的な理由)で想定されていることの一部なのでわざわざ分割して示す必要はないように見える。こちらのテトラレンマについては、ヒューム主義の定式化にさまざまな様相が複合していてよくわからない(動機づけられるのが可能であるなら必然的に現に関連する動機づけを持つ)。

ヒューム主義のような素朴な考えを表現するのに本当にこんな複雑な多重様相が必要なのだろうか。

262～263 頁あたりの記述で、錯誤説の道德的談話に対する態度の分類が紹介されているが、廃止主義の位置づけがよくわからない。錯誤説論者の提示するオプションなのかと思って読むと、「錯誤説の論証に熱心な論者たちが～廃止主義者の議論をほぼ検討することなく～」(263 頁)とあって、むしろ対立しているようにも読める。この関係はどうなっているのか。

265 頁で、「錯誤説がなお決定的と言えるような批判のない一貫した立場として可能な選択肢であるということを確認した上で」とあるが、ここまででそれを確認するような話をしていただろうか。260～262 頁あたりでは逆理的な錯誤説というものが批判に答えう

る立場として紹介されているが、仮にこれで錯誤説批判がかわせるとしても、われわれは錯誤説を信じることができないという結論になるはずで、錯誤説は「選択肢」にはならないのではないか。

266 頁の虚構主義の全般的な説明において、虚構主義の基本構造として、道德判断をするときには何かを主張しているのではなく、「 $\phi$  したいという欲求や  $\phi$  しない他者に対する非難感情といった非認知的態度を表出するという行為に従事している」と一旦説明した上で、「そもそもそれはどのような行為なのだろうか」と問うている。しかし、この問いはよくわからない。表出だというのなら表出という行為なのではないか。さらに、この問いに答えて「信ずるふりをする」「ごっこをする」という行為だ、とまとめている。しかし、「表出する」のと「ふりをする」のはまったく別のタイプの行為なので、これがどうして答えになるのかもわからない。つまり、虚構主義が「必然的な動機づけ」の問題をどう扱っているのかがこのまとめ方からは見えてこない。

268 頁で「フィクション内で（或いはメタフォリカルに）」とフィクションと比喻を同列に並べているのだが、両者は言語の利用法としてだいぶ違うものなのではないか。

## 第 10 章「義務様相表現の意味論」について

クラツァーの議論はわたしもよくしらなかったので大変勉強になった。順序付けの仕組みを導入することでチザムのパラドックスなど、古典的義務論理が抱えていた問題は回避されるという理解でよいだろうか。

解説論文として見たときにいくつか思ったことがある。

義務論理の単純な形式では困難に陥るという具体例を先に示してからクラツァーの立場を紹介した方がよかったのではないか。順番に読んでいくとクラツァーの複雑な道具立ての動機づけがよくわからない。

「フォース」はある程度説明があるが、「フレーバー」の方はまったく説明がなく、「義務的フレーバー」などの具体的な用例からなんとなく伝わるような形になっている。

303～304 頁の様相ベースの解説がとてもわかりにくい。わかりにくくなっている理由の 1 つは、「命題」という言葉が、われわれが普通に理解するものとしての命題と、「その

命題が真である可能世界の集合」という意味の両方で使われているのにそのことについての注意喚起がないからだと思う。

本章の内容からは外れるが著者に質問したい点。義務論理とフレーゲ＝ゲーチ問題の関係は以前から気になっていた問題なのだが、クラツァーの理論ではどういう扱いになるのだろうか。表出主義者が「道德判断は表出行為だけれどもクラツァー理論にそって運用されます」と宣言すればフレーゲ＝ゲーチ問題は回避されるのか。というかそもそもクラツァー理論は道德判断を事実命題の一種として捉えるのか、他の解釈を許容するのか。そのあたりはどうだろうか。

## 第 11 章「我々は客観主義者なのか」について

道德判断の客観性や相対性についての実験哲学的な知見をレビューしていただいている大変ありがたい。

本章でメタ倫理学の立場の選択肢として反応依存説や文化相対主義が挙げられている(321 頁) が、そういえばこれらの立場はここまでの章ではあまり取り上げられてきていない。

これはメタ倫理学とメタ倫理学的問題についての実験哲学の間で、問題設定にずれがあることを示しているのだろうか、それともたまたま本書ではずれてしまっただけなのだろうか。

調査の結果は客観主義を示唆する証拠と相対主義を示唆する証拠が両方出てくるということだが、これはわれわれの道德というものについての態度が重層的であるということを示していると理解してよいのか(「中から」見れば客観主義、「外から」見れば相対主義、という複数の視点を場面に応じて上手に使い分けている、というような)。